

1 4 . サルの被害対策試験

(1) 発信機装着個体の追跡について

遠竹行俊

〔目的〕

サルの被害は、山間から里の耕地に拡がりつつあり、緊急の被害対策と同時に、基礎的生態情報にもとづく保護管理が必要になる。この基礎的生態情報の一つとしてサルの群れの移動を追跡し、地域利用の実態等を明らかにすることによって、被害対策にも役立てられる。ここでは、「群れ」を代表するオトナの雌と「離れ」のオトナの雄、ワカモノ雄に発信機を装着して、追跡することによって被害地を中心にした移動の様子を明らかにする。

〔方法〕

被害が顕著なあきる野市戸倉（盆堀）地域で、捕獲した個体に電波発信機を取り付けて追跡した。サルの群れは夜間に移動することは稀であるので、夕暮れ後に発信機の位置を確認した。捕獲し追跡した個体は、オトナの雌（約5才）、オトナの雄（約11才）、ワカモノの雄（約3才）各々1頭であった。なお、サルの群れは、雌とアカンボウと少数のオトナ雄で構成されており、ワカモノ雄の存在は判らないことが多いので参考までに追跡した。

〔結果〕

オトナの雌は9月24日から12月11日までの期間に35回の位置確認ができた（図-1）。このオトナ雌の移動は、群れの移動と読み替えることができる。その結果、僅か2か月余の短い期間に、位置確認35回の内26回は盆堀の狭い地域を集中的に利用していた。11月には、利用地域の中心地の西約4kmを含めて、すべて集落の周囲を移動していた。また、今までわかっていた「盆堀の群れ」の行動範囲をはみ出して、秋川を北に渡っていた。

オトナの雄は10月5日から12月11日までの期間に30回の位置確認ができた（図-2）。このオトナ雄は、1回を除いてすべて盆堀地域の集落周辺に確認できた。オトナ雌の群れと行動を共にすることもあったが、独自の行動も見られた。

ワカモノの雄は11月8日から11月24日までの期間に13回の位置確認ができた（図-3）。この個体は、青梅市内で保護された後放獣したので、不明な点が多い。またこの雄は、保護当時体重約7kgあり、また、市街地に出没し、威嚇が激しくヒトを近づけなかった。13回の軌跡は15kmの範囲に及び、オトナ雄の行動域より一桁多い距離を移動し、不規則な結果であった。

今後、群れを代表するオトナ雌の複数に電波発信機を装着し、正確な群れの利用地域や環境、夜の休息場所、群れの離合集散の有無、群れの規模、被害を出している要因等を明らかにする。また、群れが新しい利用地域を拡大してゆくきっかけになる可能性として、ワカモノ雄の行動も重要である。ワカモノ雄を含む単独雄は、時として市街地に出没してヒトを威嚇することがあり危険なことがある。市街地への出没は、群れが集落に依存しヒト馴れすることと無関係ではない可能性がある。今後の調査を積み上げて、群れの接近をいち早く察知し、被害を予防する手法や、サルとヒトの棲み分けによる保護管理手法の確立を図っていく。

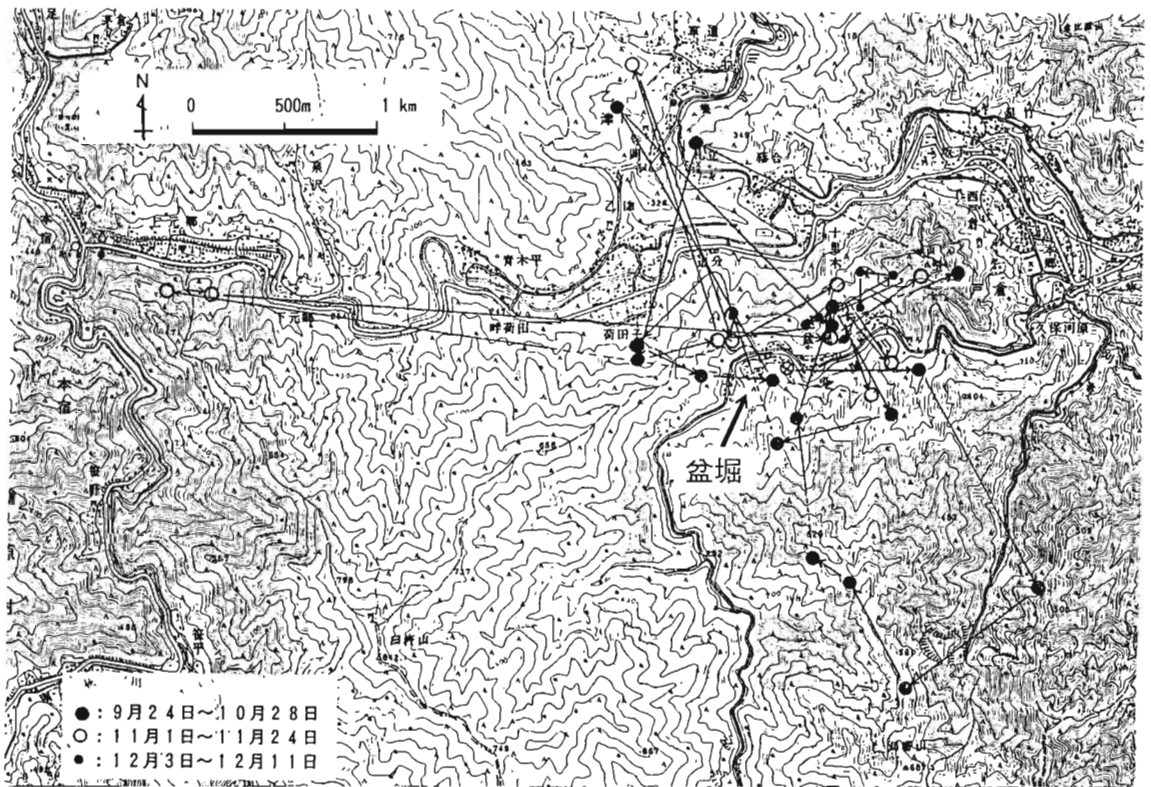


図-1 雌（オトナ）の休息位置と移動ルート（平成7年9月24日～12月11日）

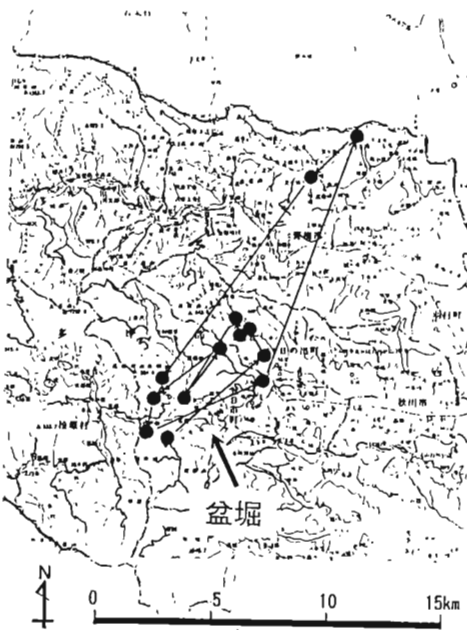


図-3 雄（約3才）の休息位置と移動ルート
（平成7年11月8日～11月24日）

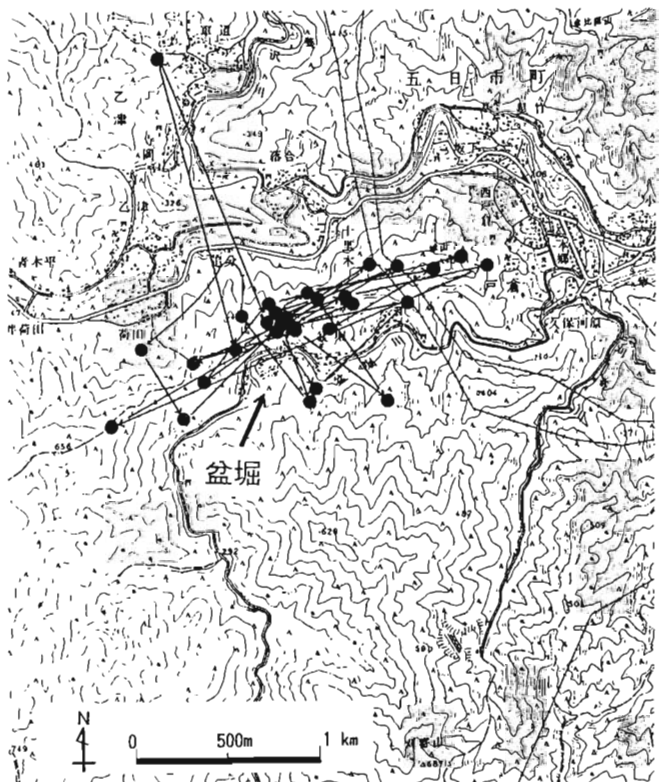


図-2 雄（オトナ）の休息位置と移動ルート
（平成7年10月5日～12月11日）